



多様な働き方で「生涯現役社会」を

ライフプラン委員会

誰もが100歳まで生きることが当たり前となる時代に備え、産経新聞社が立ち上げた有識者による「100歳時代プロジェクト会議」はこのほど、ライフプラン委員会（野村証券協賛）を開き、100歳時代に必要な働き方改革などについて議論した。委員会は、人口減少問題の克服や生きがいの創出のためにも、多様な働き方を認め、働く意思と能力のある高齢者ができるだけ長く働ける「生涯現役社会」の実現が急務だと提言した。

委員は日本私立学校振興・共済事業団理事長で前慶應義塾長の清家篤氏、元滋賀県知事で「100歳大学」を提唱する國松善次氏、GNEX代表で内閣府の「人生100年時代構想会議」の有識者委員を務める三上洋一郎氏。

清家氏は「人口減少社会では、働くだけでなく複数の役割を担う『一人複役』が重要だ」と指摘。國松氏は「就労は生きがいの重要な要素。働くことが楽しい社会を作ることが大事だ」と語った。三上氏は「時代にそぐわなくなった制度を改革し、多様な働き方を阻害する要因を取り除く必要がある」と述べた。

人口減少で三重苦

100歳時代の課題は
清家氏 日本は世界に類を見ない高齢化によって労働力人口が減少し、その結果、生産の減少、消費の縮小、社会保障の持続可能性の低下という「三重苦」に直面する。しかし高齢者や女性ももっと働ける、能力を発揮できるようにすれば三重苦は軽減される。「生涯現役社会」を実現することが日本の将来に必須の課題だ。

國松氏 私たちは人類が経験したことのない高齢者が社会の3分の1を超える「異常高齢社会」のなかで老いていく。老いの時間、人生の下り坂が30年もあるのに、その覚悟と備えをしない。老いの生き方について学ぶ必要があると考え、65歳からの義務教育として「100歳大学」を提唱している。三上氏 若い世代は壁の先が見えない、日本がどうなっていくのか予測がつかないことへの不安を感じている。社会の仕組み作りや心の準備ができて

就労は生きがい

なぜ生涯現役社会が必要なのか
清家氏 今の社会保障制度を維持しよと思うと、保険料も税金も重くなる。若者が疲弊してしまふ。人生100年になると、20代前半から65歳まで働いた場合、働いて社会を支える期間と引退して支えられる期間がほぼ同じ、子供の期間を含めると、支えられる期間の方が長くなってしまふ。働く意思と能力のある人ができるだけ長く働ける社会を作らないと、若者の負担感はずっと重くなる。

國松氏 長い老後において、生きがいは絶対的に必要で、その重要な要素として就労がある。趣味も大事だが、仕事や社会に役立つ役割があることは人を幸せにし元気にする。可能な範囲で働くという生涯現役の実現には、働き方のスタイルを変え、就労の概念も変えていく必要がある。三上氏 80歳を超えて働いている祖

優良中小企業が見本

生涯現役を実現するのに必要な仕組みは
清家氏 生涯現役を実現しやすい職場は、地方の「グローバル・ニッチ・トップ」といわれる中小企業に多い。年齢とともに賃金が上昇する年功賃金の傾斜が緩やかなので、長く雇用し続けてもコスト負担が少ないので、定年退職制度という生涯現役を制約する縛りが弱い。そうした中小企業では高齢者の技術や経験といった能力が競争力の源泉になっている。

國松氏 仕事があると生きがいになり健康にも良い。年金をカバーする収入も得られる。一方で人手が足りないという社会のニーズがある。まずは働き続けた方が得たという時代が来ていることに早く気づいてほしい。どんな仕事か自分に合っているか選択するには「学び」が必要。働ける場所や働き方の情報を行政だけでなく民間も含め分かりやすく提供できるようにすれば解決策になる。生き方の学びと情報提供の仕組みを作り、うまくエスコートすることが大切だ。

三上氏 例えば、大企業で生産ラインの管理をしていた人が定年後に中小企業で生産性の改善のために働くというのが一つのモデルケースだが、マッチングがうまくできていない。抵抗感があるのではないかと。大企業から中小企業で働くことが、むしろかっこよいことだという意識を社会全体で醸成することが必要なのでは。

「一人複役」が目的

100歳時代に求められる働き方改革は
清家氏 生涯を通じて働くためには生涯を通じた能力開発が必要。目の前の仕事に忙殺されては難しいので、自分自身に投資するために労働時間を減らすことが大切だ。労働時間が長く、働く期間が短い縦長の長方形から、時間は長くなって期間が長い横長の長方形に変えるイメージだ。人口減少社会では、誰もが仕事をし子育てや家事をし、地域を支える活動もするという「一人複役」が重要で、それが働き方改革の一番大事な目的だと思ふ。

一人一人が自立して生活できる「自助」を成り立たせるためにも、「一人複役」がカギとなる。

國松氏 生涯を通じて働くには、これまでの働き方を「破算」しないとい

議論のポイント

- 日本は労働力人口の減少で「三重苦」に直面
- 高齢者ができるだけ長く働ける生涯現役社会が必須
- 定年退職制度のない優良な中小企業を手本に
- 学びと情報提供で高齢者の就労をエスコート
- 就労は生きがいの重要な要素
- 労働時間に基づく働き方の概念を根本的に転換
- 仕事だけでなく複数の役割を担う「一人複役」が大切
- 多様な働き方を阻害する制度の改革を
- 豊かな老後には金融資産の運用も大切
- 一人一人が自立して生活できる「自助」が基本



GNEX代表 三上洋一郎氏

みかみ・よういちろう 平成10年生まれ。デジタルマーケティングを手掛けるGNEX代表で、慶應義塾大学総合政策学部3年。内閣府の「人生100年時代構想会議」の有識者委員を務める。



健康・福祉総研理事長 國松善次氏

くにまつ・よしつぐ 昭和13年生まれ。34年滋賀県立短大農業部卒、大阪府庁入庁。41年中央大学法学部卒。51年滋賀県庁入庁。平成10年に滋賀県知事に初当選。18年まで2期を務めた。「100歳大学」を運営する健康・福祉総研理事長。



日本私立学校振興・共済事業団理事長 清家篤氏

せいけ・あつし 昭和29年生まれ。53年、慶應義塾大学経済学部卒。博士(商学)。平成21年、慶應義塾長、30年4月から日本私立学校振興・共済事業団理事長。社会保障制度改革推進会議議長、ILO「仕事の未来世界委員会」委員などを兼務。

人口減少で「三重苦」

いない。

就労は生きがい

100歳時代の課題は

100歳まで生きる。こと前となる時代に備え、産が立ち上げた有識者によ0歳時代プロジェクト会ほど、ライフプラン委村証券協賛)を開き、1代に必要な働き方改革なて議論した。委員会は、問題の克服や生きがいのめにも、多様な働き方を意識と能力のある高齢だけ長く働ける「生涯」の実現が急務だと提言

清家氏 日本は世界に類を見ない高齢化によって労働力人口が減少し、その結果、生産の減少、消費の縮小、社会保障の持続可能性の低下という「三重苦」に直面する。しかし高齢者や女性が増え、能力を發揮できるようにするには三重苦は軽減される。「生涯現役社会」を実現することが日本の将来に必須の課題だ。

なぜ生涯現役社会が必要なのか 清家氏 今の社会保障制度を維持しようと思うと、保険料も税金も重くなり若者が疲弊してしまふ。人生100年になると、20代前半から65歳まで働いた場合、働いて社会を支える期間と引退して支えられる期間がほぼ同じ、子供の期間を含めると、支えられる期間の方が長くなってしまふ。働く意思と能力のある人ができるだけ長く働ける社会を作らないと、若者の負担感はずます重くなる。

國松氏 私たちは人類が経験したことのない高齢者が社会の3分の1を超える「異常高齢社会」のなかで老いていく。老いの時間、人生の下り坂が30年もあるのに、その覚悟と備えをしていない。老いの生き方について学ぶ必要があると考え、65歳からの義務教育として「100歳大学」を提唱している。

國松氏 長い老後において、生きがいは絶対的に必要で、その重要な要素として就労がある。趣味も大事だが、仕事や社会に役立つ役割があることは人を幸せにし元気にする。可能な範囲で働くという生涯現役の実現には、働き方のスタイルを変え、就労の概念も変えていく必要がある。

三上氏 若い世代は壁の先が見えない、日本がどうなっていくのか予測がつかないことへの不安を感じている。社会の仕組み作りや心の準備ができて

三上氏 80歳を超えて働いている祖

日本私立学校振興・共済事業団理事長

清家篤氏

は「人口減少社会」ではなく複数の役割を担う「役」が重要だ」と指摘。「就労は生きがいの重要な働くことが楽しい社会を大事だ」と語った。三時代にそぐわなくなった革し、多様な働き方を阻因を取り除く必要がある



日本私立学校振興・共済事業団理事長

清家篤氏

せいけ・あつし 昭和29年生まれ。53年、慶應義塾大学経済学部卒。博士(商学)。平成21年、慶應義塾長、30年4月から日本私立学校振興・共済事業団理事長。社会保障制度改革推進会議議長、ILO「仕事の未来世界委員会」委員などを兼務。

健康・福祉総研理事長

國松善次氏



健康・福祉総研理事長

くになつ・よしつぐ 昭和13年生まれ。34年滋賀県立短大農業部卒、大阪府庁入庁。41年中央大学法学部卒。51年滋賀県庁入庁。平成10年に滋賀県知事に初当選。18年まで2期を務めた。「100歳大学」を運営する健康・福祉総研理事長。

GNEX代表

三上洋一郎氏



みかみ・よういちろう 平成10年生まれ。デジタルマーケティングを手掛けるGNEX代表で、慶應義塾大学総合政策学部3年。内閣府の「人生100年時代構想会議」の有識者委員を務める。

父は健康診断でまったく問題がない。社会との接点があること、打ち込める仕事を続けることが大事だと実感している。自分の好きなことを生きがいとするためにも、できるだけ多くの選択肢を持てるようにしたい。

優良中小企業が見本

生涯現役を実現するのに必要な仕組みは 清家氏 生涯現役を実現しやすい職場は、地方の「グローバル・ニッチ・トップ」といわれる中小企業に多い。年齢とともに賃金が上昇する年功賃金の傾斜が緩やかなので、長く雇用し続けてもコスト負担が少ないので、定年退職制度という生涯現役を制約する縛りが弱い。そうした中小企業では高齢者の技術や経験といった能力が競争力の源泉になっている。

國松氏 仕事があると生きがいになり健康にも良い。年金をカバーする収入も得られる。一方で人手が足りないという社会のニーズがある。まずは働き続けた方が得だという時代が来ていることに早く気づいてほしい。どんな仕事で自分に合っているか選択するには「学び」が必要。働ける場所や働き方の情報を行政だけでなく民間も含め分かりやすく提供できるようにすれば解決策になる。生き方の学びと情報提供の仕組みを作り、うまくエスコートすることが大切だ。

資産運用で豊かな老後

100歳時代にはお金の備えも重要だ 清家氏 高齢期の生活を豊かにするには、「自助」としての金融資産の運用益も大切な柱となる。日本経済を成長発展させるためにも資産を運用する投資家としての役割は大切だ。加齢による認知機能低下に備えて、個人年金や投資信託など事前契約も有効。高齢になっても運用できる人には年齢で区切るのではなく、金融機関がニーズや身心の状況に応じて個別に対応できるようにすることも必要だ。

國松氏 お金の備えは100歳大学でも必須科目だ。大切なのは、生涯現役をマネープランの一環として入れること、収入に見合った生活プランを立てること。そうしたことを避けても100歳人生の折り返し点の50歳頃までに予習し、備えておく必要がある。

三上氏 日本の学生は金融資産に関するトレーニングを受けていない。キーワードは知識。資産を守っていくにはどうすればいいのか、投資はしなくてもせめて目減りしないようにするにはどうすればいいのか。最低限の知識を身に付けることが大事だと思う。

自助が基本 100歳時代に必要なのは 清家氏 人生100年を豊かに暮らすためには自助が基本であり、それを下支えるために相互に助け合う社会保障の「共助」と社会扶助の「公助」がある。自助を実現できる条件を整えていくことが必要だ。

國松氏 自助、共助、公助に加え「商助」がある。医療や介護もビジネスとして良質なサービスを提供できる。100歳時代には、生涯現役を前提としたライフプラン、社会の仕組み、ビジネス、価値観など「100歳文化」の創造が必要だ。

三上氏 時代にそぐわなくなった古い制度を改革し、本来あるべき姿に変えていけない阻害要因を取り除いていかなければいけないと感じている。

「一人複役」が目的 100歳時代に求められる働き方改革は 清家氏 生涯を通じて働くためには生涯を通じて能力開発が必要。目の前の仕事に忙殺されては難しいので、自分自身に投資するために労働時間を減らすことが大切だ。労働時間が長く、働く期間が短い縦長の長方形から、時間は長くなって期間が長い横長の長方形に変えるイメージだ。人口減少社会では、誰もが仕事をし子育てや家事をし、地域を支える活動もするという「一人複役」が重要で、それが働き方改革の一番大事な目的だと思う。一人一人が自立して生活できる「自助」を成り立たせるためにも、「一人複役」がカギとなる。

「一人複役」が目的

自助が基本 100歳時代に必要なのは 清家氏 人生100年を豊かに暮らすためには自助が基本であり、それを下支えるために相互に助け合う社会保障の「共助」と社会扶助の「公助」がある。自助を実現できる条件を整えていくことが必要だ。

自助が基本

國松氏 自助、共助、公助に加え「商助」がある。医療や介護もビジネスとして良質なサービスを提供できる。100歳時代には、生涯現役を前提としたライフプラン、社会の仕組み、ビジネス、価値観など「100歳文化」の創造が必要だ。

三上氏 時代にそぐわなくなった古い制度を改革し、本来あるべき姿に変えていけない阻害要因を取り除いていかなければいけないと感じている。

論のポイント

- 学びと情報提供で高齢者の就労をエスコート
- 就労は生きがいの重要な要素
- 労働時間に基づく働き方の概念を根本的に転換
- 仕事だけでなく複数の役割を担う「一人複役」が大切
- 多様な働き方を阻害する制度の改革を
- 豊かな老後には金融資産の運用も大切
- 一人一人が自立して生活できる「自助」が基本